

「初期プライマリケア研修

初期臨床研修の活用法と臨床的見識について」

聖路加国際病院・院長 日野原重明 監修
21 世紀の医療をつくる若手医師の会 執筆

沖縄県立中部病院・副院長

宮 城 征四郎

日本において、幅広い臨床家 (generalist) に育たんと欲すれば、他の医師の何倍ものエネルギーを駆使して死に物狂いに努力する以外には現在のところ、方法がない。しかも、1つの臨床研修病院や医育機関のみでは、通常、その目的は到達せられない。

その理由の1つに、日本の卒業臨床研修システムには、おしなべて大きな欠陥があり、欧米のそれに比して研修・教育環境が必ずしも整っていないことが挙げられる。

良い教育・研修環境とは、各個人ではたいして大きな努力を払わなくとも、ただそこに身を置いて、日々のカリキュラムをこなしているだけで、与えられた期間内にはいつの間にか(!), 気がつくと思ふべき一定のレベルの臨床の知識と技術が身に着いているというものでなければならぬ。

現在の本邦における研修システムの不備について、個人的には大きな不満や焦燥を表明する有識者はいても、その改善の方策を模索し、長期的展望に立って将来の良き臨床家が育つための臨床研修に関するアドバイスを集団で真剣に取り上げた研修読本は、これまであまり前例がない。

本書は現状の研修システムに鋭いメスを加え、本来の研修の在るべき

姿を浮き彫りにし、21世紀に向けて多数の良医が輩出することを明確に意識して表された画期的な研修読本と言えるであろう。

その内容の大部分は2年間に限った初期研修を対象に記述され、研修病院の選択や研修システムすなわちスーパーローテートや複数科ローテート、単科ローテート方式などのメリット、デメリットなどについて、著者らの経験を活かして詳述し、また、その研修中に習得すべき患者との対応の仕方や臨床家としての責任の所在、すなわち“臨床的見識”について、常に患者側に立った視点で具体例を挙げて論述している。

特に、何科の医師であれ、長期フォロー中の患者に生命予後を左右するような重大な他科疾患を見逃せば、その臨床的責任を決して免れないと繰り返し述べている下りは誠に至言であり、研修医のみならず、すべての医師が重く受け止めるべき言葉である。

本書を読み進んで多少不満が残る点は、研修病院を選択するうえで最も重要と思われる医育機関の医療体制、その病院全体の医療のポリシーや指導医の臨床的実力、研修委員会の在り方などについてあまり触れられていないことである。

営利主義・研究中心主義・職員本

位 vs 患者本位の医療体制、日中のみ水準の高い医療 vs 昼夜の区別なき医療のレベルの均質化、慢性疾患中心の医療 vs 急性・慢性両疾患に常時対応できる24時間救急体制を含む医療システム、小数の稀有な疾患中心の研修 vs Common diseaseを中心とした疾患の多様性と十分な患者数による研修、日本の臨床医療 vs 国際的医療のスタンダードを身に着けた指導医群の存在、主治医制度 vs 研修レベルごとに役割分担の異なるチーム医療の採用、指導医本位 vs 研修医本位の研修委員会の姿勢、などを更に深く掘り下げることがより重要であり、これらの点を見無視した病院選択は初めから失敗に帰することは火を見るよりも明らかである。

願わくば第2版において、諸外国での full clinical training の経験者を執筆陣に加え、より国際的視野に立った臨床研修の在り方についても触れていただけたらと思う。

だからと言って、しかし、本書の価値が大きく損なわれていることにはならず、医学生や研修医のみならず、研修に携わるすべての関係者が一読すべき良書であることには変わりはない。

● A5 頁146 1994 定価1,751円 (税込) 7400

医学書院 刊 (☎ 03-3817-5657)